

究の展開の上で村研が果してきた役割を明確にしようというものである。村研の成立当初には村落研究者を大きくつみ込むような研究課題もあり、多分に集約的な運営が行えたのに対し、その後の展開の過程で一方では、研究関心の多様化が進むとともに、他方では、全体を集約する形での課題設定が困難になり、いくつかの曲折をへてきたのであった。このことは、村落研究が発展して内容豊富になつたことを示すものか、逆に研究の沈滞を示す兆候なのか検討の必要がある。第二の問題は、村研の活動を主にその共通課題のもとづいて時期区分し、それぞれの時期にいかなる課題が追求されたのか、今日の村落研究に要求されている視点からみたとき、それぞの時期に適切な課題の解明がなされていたか否かを検討しようということであった。大会の報告においては、第一の問題については、これ以上たちいることをやめて、第二の問題にかかわって若干の展開をこころみたいと思う。

さきの研究会の報告において、今日の村落研究に要求される視点として「農村地域社会に進行する管理化の様相と、地方自治体を含めた農村地域社会の民主的組織化の展望を明らかにすること」を指摘しておいた。農村地域社会の管理化と組織化を問題にするとき、村研がその研究の蓄積をかけねばならない問題は、現段階におけるわが国の村落がいかなる特質と可能性をもつているのかを提示することである。村研はこれまで、日本村落をめぐる研究をかさねてきたわけであるが、なお重要な点でいくつかの未解決の課題を残している。そして、その未解決の課題について、若干でも前進させること

村落と村落論 — その推移と課題

蓮見音彦

が、上記の視点からの村落研究ないしはわが国の社会科学の進展をもたらすものに他ならない。

近年、農村地域社会に進行する管理化の状況については、さきに私見をまとめておいた。（拙稿「一九七〇年代における農村社会の変動と村落」社会学評論一一四）上記の視点からすれば、この管理化に对抗するものとしての民主的組織化の展望の検討が必要となるが、これを問題にする実証的基盤は今日あまりにも乏しい。そこで、管理化と組織化の社会的条件の一つを検討するという意味で、村落の性格規定を明確にしておくという作業が、当面要請されることになる。もちろん、管理化や組織化は、村落を通じて、いわんや村落のみを通じて、行なわれるものではないから、この作業のもつ意義も限定されたものではあるが、村研の研究領域とのかわりからすれば、避けることのできないものであろう。この問題についての多様な論議を整理するだけの余裕がないので、若干の問題点の所在を指摘するにとどまらざるをえないが、大会における討論の成果に期待をかけておきたい。（報告要旨をまとめる時間的余裕のないまま、報告の見通しのみを記すにとどまったことを御許しいただきたい。）